

## 心に響くクリスマスプレゼント

今年、地域の役員になった私はクリスマス会の企画・運営にあたりました。

クリスマス会は子どもから高齢者までが一堂に会する自治会の一大イベントです。私は会場系の責任者としてその設営にあたりました。

「前列に高齢者席を設置」「子どもや高齢者の目線に立った会場案内図の掲示」「華やかさと安らぐ雰囲気を出す和紙クラフトの装飾」など来場者に喜んでもらえるように工夫しました。準備完了、あとは明日の本番を待つばかりとわくわくしながら帰宅しました。

夕食後、子どもと犬の散歩に出かけると、まだ、会場の公民館に灯りがともっていたので、そっとホールを覗きました。するとその時、高齢者席の位置が変わっているのに気づいたのです。

「え～っ!？」誰がどうして変えたのでしょうか。

不思議に思って公民館長に伺うと、スピーカーの設置をしたとき、音響係の人が高齢者に配慮して前列から前方右側へ移動させたということでした。

話を聞いて状況はよくわかりましたが、私の知らないところで変わっていたことに少し不満を感じました。公民館を出て、歩きながら、子どもにそのことを言うと、

「お母さんの気持ち、ようわかるわ。」と返してくれて、さらに次のように話を続けました。

「実はなあ、お母さんだって、この前、私が洗濯物を干しておいたら、お母さん、全部干し方、変えたやん。せっかく私が干しておいたのに、『なんで!？』と思ったんや。ちょっと腹が立ったわ。そのあと、私がぶつぶつ文句を言ったら、お父さんが、『太陽の向きを考えたら、こっち向きに干す方がいいんとちがうか？洗濯ばさみは、風が強く吹いたとき、干した物が片寄らないようにこう付けた方がいいんやで。』と、説明してくれたから、なるほどと思ったけどな。ただ、お母さんがその時、何で変えたのか、私にちゃんと言ってくれたらよかったのにと思っていたんやで。」

「そうやったんか、お母さん知らなかったわ。」と言いつつ、私は、子どもの言葉にハッとしました。

自分がされたことや言われたことには強く意識が働けけれど、自分がしたことや言ったことが、相手にどのように伝わっているかということに気づいていませんでした。「相手の立場に立って考えること」や「コミュニケーションの大切さ」を子どもが教えてくれました。

私は「よう、言ってくれたなあ、ありがとう。」と子どもに告げ、満天の星空に見守られながら、何だかスッキリとした気持ちで家路につきました。